

95年上半期思想状況

「われわれをどう立ち上げるか」モノローグの戦後

年初の阪神大震災にはじまって、三月の地下鉄サリン事件さらにはオウム真理教をめぐるメディアの異常な過熱ぶりといった具合に、「戦後50年」に当たる1995年は、奇しくも異常な出来事が相次いだ。この戦後の「最後の戦後年」に、節目の年と言われる「50」という数字の魔術にとらわれず、一休をみるべきか、50という数字の魔術にとらわれず、「私個人」としては「日本人」として、責任主体としての「われわれ」をどう立ち上げていくのか、また、戦後のリアリティが薄くなった現在の、われわれは歴史をどう引き受けたいか、また、同時に「過去」を「過去」としていかにか埋めたいのか、西谷修・姜尚中・橋爪大三郎の三氏が論じた。

座談会

西谷修
Mitsuharu Osamu 明治学院大学フランス学

姜尚中
Kang Sang Jung 国際基督教大学政治思想

橋爪大三郎
Masaharu Hashizume 東京工業大学社会学



写真撮影＝宮内勝

思想的な修羅場

橋爪 一九九五年は太平洋戦争が終わった一九四五年からちょうど五十年目で、節目になる年であることを運命づけられていたと思います。たぶん、今年になるとは去年までだれも想像がつかなかったでしょう。それは年頭の阪神大震災から続いて地下鉄サリン事件が起り、また百日間もいろいろ難しい問題が噴出した、そういう節目の年となった。また確かに戦後五十年ではあるわけですが、今後はそ

にしたに・おさむ氏 1950年愛知県生まれ。東京大学法学部卒。東京都立大学フランス文学科修士課程修了。現在、明治学院大学文学部助教授。主な著書に、『不死のワンダーランド』(講談社)『戦争論』(岩波書店)『夜の鼓動にふれる——戦争論講義』(東京大学出版会)、プランシヨ『明かすえぬ共同体』(朝日出版社) シュリヤ『G・パティユ伝』(河出書房新社)など。

ういうい方向に歩む意味がなくなってきたら、それは気がしますが、多分そういう括弧の最後の数年になると思います。また世界史の視点は、冷戦が加わり、冷戦以後の世界が動き出して、そのころ国内でもそれに連動する構造変化が顕著になってきた年でもある。そこに地獄が起り、バブル時代の増大したものの見方止めが刺された感、しん年になったんじゃないかと思えます。そういう意味で、ここで日本が今後どうあるべきかを出していかないと、厳しく問われている。かなり追い詰められた場所にいるような気がします。

西谷 確かに今年三月以来、とにかく思想的にものを言おうという人間としては修羅場にはいったという気がします。五十年という人間のサイクルというものを考えたときに無意味な時間ではないですね。例えは誰かが死ぬとして、その人を知っている人間にとって死者は記憶の中で生き続けるわけですが、五十年経てばその記憶の担い手も消える。つまり死んだ人間が完全に消滅するだけの長さの時間です。そのとき記憶をどうするか問題になるけれど、ヨーロッパでは一九四五年前後に第二次大戦の戦後の問い直しが行われて、日本の場合は、むしろその後昭和天皇が死に、それが冷戦の終結と重なってしまった。また冷戦以後と見ても、それまでの「戦後」の枠組みをどう形を取るかというところがまさに現実の問題として要請されていると思います。戦後五十年がちょうどそういう節目になっていて、錯綜する過去の関係をわれわれはどの程度直してゆくのかがというところが問われていると思う。たぶんオウム真理教事件といったものもあるわけですが、たしかに異様な事件のスクリーン・ドラマな面に傾くのではなく、実にちいさな形で異様な作りあげている。諸々の時代的な要素とそれわれわれが対峙す



はしづめ・だいざぶろう氏 1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学助教授。主な著書に、『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』(勁草書房)『はじめての構造主義』(講談社)など。

橋爪さんは一九九五年という年を追いこまれてるおっしゃる、西谷さんは思想的な修羅場という言葉を聞いたんですが、西谷さんは正直に言えは、あまり大きな驚きはないんです。いま自分が八九年頃か九〇年頃かを思い出して、僕はその時点を、僕は冷戦が終りを日本は最大のピンチに追いこまれていく、冷戦は、それを悔いた頃はバブル経済の絶頂期でしたから、エコノミストのなかには日本経済不滅論のよう主張をする人もおりましたが、今から見れば、そんなことはまるでなかったわけですが、僕が当時を考えたのは、日本の戦後政治をどうと見ると、基本的には一貫した自民党の保守支配の土台が吉田政治の政治的行き着くところからいって、上で政治が行われたと考えられます。平和運動や進歩運動のこともその土台の上で動いてきたと思います。それは繁栄と成長を推進するために現在のシステムを維持すべきだという理想があるななななとして、そこは保守も革新もなく、その基礎は一九四五年から五七年の七年間くらいで政治的取図が固められたと思うんです。そこに冷戦という構造が国際関係の母体として与えられた。僕は、冷戦は、この主眼を、この主眼を、つまり第二次世界大戦後から始まったという思いですが、それが吉田政治としては都合のよい状況を作り出した。ですから反体制としてのものも、そのように右側から戦後政治を否定するところも、もちろんそれも含めて、その右側の止ら果てたか、というわけ。

今も問われている問題というのは、それまでの土台となっていた保守政治の根幹が国際的にも国内的にも制度疲労を起しているところ、それに代わるオルタナティブがどの程度も作れなくなっているところ、その土台に代わって政治システムがますます硬直化してきて、国民に危機感のようなものが現れているんじゃないかと思っています。

図書新聞

THE BOOK REVIEW PRESS

2256号

特別 定価270円 (本体262円)

発行 株式会社図書新聞
〒100 東京都千代田区神田神保町1-8
電話 03-3234-3471(代)
編集室(東京) 1-488(1)520(日)半
24時6240E 読者課03-3234-7583



かん・さんじゅん氏 1950年熊本生まれ。早稲田大学卒。現在、国際基督教大学准教授。アクチュアルな思想状況をめぐって旺盛な執筆活動を展開。主な著書に『マックス・ウェーバーと近代』(御茶の水書房)など。

古書買入

取り扱い書目
明治大正小説・詩歌集・限定本・名家文藝自筆
原稿・書簡・色紙・書画複製・因文学・因語学・
近代文学・全集叢書

八木書店 電話03(3291)8221 編集・東京10457

東京都千代田区
神田神保町1-1

座談会

「われわれ」をどう立ち上げるか

てみて、多岐にわたる問題があり、原爆投下
の問題を消しきれていないですね。そうすると世界戦
争つまり全人類が生存のすべてをかけて同じ戦争で殺戮し
あったこのトラウマをこの国も解決してないと思っ
ます。韓国の場合です、在日の人達は日本のなかで逆境
を持ちつづ「われわれ」というポジションで生きてきたわ
けでしょうが、それも世界戦争のトラウマなんだと思いま
す。韓国については、現在の韓国のナショナル・アイ
デンティティーの軸は抗日というところでしょう。抗日し
ては韓国のアイデンティティーはひょっとすると崩れます
よわ。韓国は韓国で生きていく形を模索しなければいけ
ない。例えば、僕は日本人がやっていくようなことを韓国
にやってきたら後でたいさう事を基礎にしては差さ
んとは話さないと思えます。そうではなくて、差さんは戦
後で生きてきたか、自分も生きてきたかというところ
を基礎にして話します。「われわれ」というのをネ
ーション・ステイツと逆形で立ち上げたいという関係
橋爪 そうですね、韓国に賛成なんですけど、むしろネーショ
ンの形成が、日本の場合にもいかに難しい問題としてせ
上がってきていると思えます。日本はネーションの形成
に失敗していると思えますが、そのスタートは敗戦國

戦後処理問題を
突きつけられて答えを
求められるのは
「私個人」ではなくて
「日本人」ですね。
だから、これに答える
責任主体としての
「われわれ」をもう一度
立ち上げねばならない。



であるというところですね。敗戦のち、日本は東京裁判で
人類に対する罪という名のもとに裁かれ、国際社会のなか
で取り返しようもない過ちを犯したところになったわけ
です。その戦前の連綿性が、そこでターナーにならざるを
えない。そこでわれわれは歴史を失ったわけですね。歴史と
は、リアリティーの連続性であり共同性だと思えます。
われわれは韓国や中国との関係のなかでもリアリティーを
確認できないばかりか、自分たちのなかですらそれを確認
できないという。戦後与えられたリアリティーは隣國
の人たちで切れているし、自分の過去を切れている。
ネーションがどこまでなっているわけですか。ネーションの
根拠にあるのは共通の歴史的体験であるはずで、そこから
いよいよ生きていく運命を感じて、それを自分の人生
と重ねあわせる決断だと考えられます。
西谷 たた、そのさげはちょっと微妙だと思えます
が。

近代日本との関係をどう結び直すか

西谷 おつちやる通りで「われわれ」というのを立ち上
げる時には、その根拠がないと立ち上げることができない
んですね。すーっと通る必要はないかもしれないませんが、近
代日本との関係を僕らはどう結び直すかというところはあ
る。その意味で、僕は今年初めに「群像」に出た加藤典洋
の「敗戦後論」という文章がそういう問題に取り組んだも
のとして注目したんです。加藤さんも手書きのものですが
あって十分展開しきれていて、それは言えないけれども、そ
ういふ「敗戦」という出発点の汚点に向き合うというところ
いっしょに、三百万人の日本の死者をどう扱うか、という
形で問いを立てたんですね。それをやらない限り、「われ
われ」というのは立ち上がらない。世界戦争というのは歴史
史上初めて世界が同時に戦後を迎え、その時に存在のレベ
ルで世界の共時性というのが成り立ったとすると、まさに
「世界史」がそこで統合された。するとそれ以後は、日本
がおこなった戦争というものが世界史のなかにあるわけ
です。ですから、その世界史のなかでの戦争が何であ
ったかというのを僕らは確認しなければいけないし、そ
れは他の人達にとつとも世界に共有されるものでなくち
やいけない。それが前提ですね。

姜 僕は昨日が朝鮮戦争四十五周年の日だったんです。
また今年には日韓条約三十年の年でもあります。いまの西谷
さんと橋爪さんのお話は、歴史の共時性を共有できなかった
たことだと思えますが、例えば中国は戦後内戦状態
だったわけですし、台湾も大きな問題を抱えていて、ある
種のシビル・ウォーを戦ってきた。朝鮮戦争もベトナム戦
争も同様なシビル・ウォーだと思えます。ですから、冷戦
の終焉ということも言われても、そういう言い方は僕は欧

西谷修十 姜尚中 橋爪大三郎

構造としては戦中が
そのまま引きずられて
いるにもかかわらず、
意識のレベルや
歴史感覚においては、
国民としてのわれわれが
成り立たないほどに
歴史の喪失が行われている。
そのギャップが問題だ。



米だけに当てはまらないと思えます。冷戦というの
は、シミュレーションでの仮想戦争であって、一度たりと
も戦闘状態にならなかつた奇妙な戦争なわけですね。しかし
東アジアや東南アジアにおいては実際の戦争があつて、そ
れが局地戦争と言われたわけですね。確かに日本における冷
戦の構造にも、核の問題があつて、それを過剰殺戮最終戦
争と仮想して、そのために抽象度の高い平和主義にむかっ
ていったというのはそれなりの理由があつたと思えます。
ただその分実際の局地戦争で戦っている地域と日本との近
代以来の関係のなかで、戦後にそれをどう捉え直してい
かという視点は非常に希薄だったと思えます。つまり地
域間の戦争を米ソの二元論に還元してしまつたわけ
です。先程、日本の戦後のリアリティーはアメリカから押し
つけられたものかも知れないと言われましたが、そういう
あり方で見えてきたことがこの現実から乖離してたとい
うのが見えてきたと思えます。

しかし、例えば日本の周辺で起つた朝鮮戦争といつ
のも四十五周年にもかかわらず、ほとんど話題にならな
いんですね。考えてみると、そういうことは日本の戦後史の
大前提だと思えます。アメリカでは朝鮮戦争の時、
朝鮮戦争と台湾戦争をどうするかという企画がいろいろあ
つたし、ニューヨーク・タイムスもそのことを書いていま
した。しかし日本のメディアではそういうことはほとんど
脱落している。そういうところを見ると、僕は、戦後の日
本のまわりとの関係の捉え方というのはほとんど変わらな

かつたように思えます。
そこで二話ばかり指摘しておきたいことがあるんです。
それは近代百年というところ、今年はずいぶん下関条約か
ら百年です。日清戦争から日本は植民地帝國としての
道を歩みはじめたわけ、その延長上に十五年戦争もあつ
た。日清戦争から戦後五十年という時間の括り方をすれば、
ほとんど十五年戦争期を逸脱期として、ほかは同質の時間
として括られてきたのではないかと。そう考えると、僕はも
しろ百年というタイム・スパンを取った方がいんじゃない
かと思えます。それは軍事力であれ経済力であれ、と
にかく力の思想に駆動されて無窮運動を展開してきた日本
【面】続く.....

